

# 現代日本 文学の概観

片岡 良一





# 現代日本文学の概観



ここには現代と近代とを一応区別して考える。

近代は云うまでもなく人間解放の時代であった。人間があらゆる強権の支配や旧い中世的な軌範から解放されて、それ自身の権威を恢復した時代であった。だからここでは人間の住む「現実の世界」が何ものにもまして重視され、「人間」とか「個人」とか「個性」とか「自我」とかいうものが尊重された。自由主義・民主主義・個人主義・個性主義・主我主義等がだから当然近代思想の中

枢となるのであり、そうした近代思想のすべてにわたる基盤として、現実主義が考えられたのである。そうした近代であつたからこそ、此の時代に於ける文学の方法などでも、写実主義がその基本的中樞的なものとなつていたのである。そうした方法への徹底を示した自然主義に於て、わが国の近代文学ははじめて確立されたと云われる所以である。

が、そこで少し注意せねばならぬことは、人間が解放されて自由になつたということが、何等の軌範もない恣意が許されるようになったというのと、決して同義語で

はないことであろう。あらゆる強権から解放されて、何ものの支配をも受けなくなったということは、人間が自ら自分自身を支配するものとなったというのと同じく、同義語なのである。人間誰もが主人持ちでない、自分が自分の主人であり得る世界、それが即ち近代の社会であったのであり、その意味で「自由」と「自主」とは相関不離の関係にあることになるのである。そうしてそのような自ら支配し、自ら治めるものの形造る社会であるが故に、そこでは政治の形態としても、人間すべてが多かれ少かれ自分自身の意志や希望を反映させ得る、代議政体

が選まれる。自ら選んだ代議士の議定した法律が、だから当然此の社会に住む人間の生活軌範となる。と同時に、自ら治めるための主体的内在的な拠りどころとしては、人格主義などが説かれる一方、そうしたものの更に根柢をなすものとして、「人間本来の性質」とか、「自然法」とか「まこと」とか「内部的な真実」とか、更に一步を進めては「真理」とかいうものが尊重されることになり、ひいてはその真理を探求するものとしての学問とか科学とかいうものが尊重されることにもなった。それは一方から云えば人間の営む現実の生活を強く豊に発展させる



ための武器として、即ち所謂実学として尊重される一面もあつたと同時に、そうしたモラリスティックな意味をもこめて尊重されたのもあつたことを、特に力説したいと思う。そうしたことの結果、忠でもない孝でもない、それが真理であるか否か、学問的に正しいか否かということこそが、近代人の生き方を決定する最後の指標となるようなことにもなつたのである。それはしばしば錯覚されていたような、近代の道義性放棄なのではなく、新しい道義——或は生活基準の樹立だったのである。

そんな風に考えると、近代という時代が、極めて主知

的な、所謂知性の尊重の上にあつた時代であることも、おのずから理解されるであろうし、それがまた上記の現実主義やリアリズムの問題とも相関的なものであり、最も知的な性質の上に立つ小説が近代文学のジャンルとして最も中枢的典型的なものであつた必然なども、自然に諒知されることであろうと思う。近代思想の最初の文学的発現でありながら、そういう諸特質にまでは徹底し得なかつた浪漫主義の、主情性や内部的眞実の重視は、その意味で近代主義的成熟の未しさを、反映するものになるのである。そういうところを経て、主知性や眞理や科

学を尊重するようになったところに、近代主義の成熟や発展が認められたのである。

が、そういう近代は、一方にはまた、個人の利益追求を人間生活の根本的態度として許容する組織の上にあつたために、ともすれば狭い利己主義が跳梁しようとしたような、そんな暗側面をも持っていたし、またそれでなくても、個人や自我をのみ尊重する結果が、社会生活を軋みの多い、人間相互を気持の上に何等のつながりもない、ばらばらな存在としてしまう危険などを孕んでもいた。そういうところから来る社会生活上の不調和を救う

ために、愛が説かれ人道が説かれ人権の平等が説かれ人格の相互的尊重が説かれた。そういうモラル——或は人間相互をつなぐ紐帯によつて、社会生活の軋みや荒涼化を救おうとしたのである。そういうところに近代思想の外延が認められてよいのではないかと思う。

ていねいに調べて行ったら、きりがな<sup>い</sup>ことであろうけれども、極く大まかに要約すれば、近代とは、要するに以上のようなものをその主要な思想的骨格として、その上に厚く肉づけされた時代であつたということが出来るのだと思う。

ところで、そういう近代は、わが国に於ては、周知の通り十分確立されるところまでは行かなかつた。明治十年代末葉に所謂民権運動が変質して、それ故に政治から文学に転向した多くの青年作家その他が悲觀的傾向の作品に耽つたのを端緒として、それから後の浪漫主義は挫折し、自然主義は半産したという文学の歴史からだけでも、そのことは知られよう。にもかかわらず、浪漫主義や自然主義がともかくにも誕生して、歪みなりにもせよそれぞれの歴史と発展とを示しているところ、わが国の歴史も、大勢としては近代化への道筋を辿

つていたのであることが、諒知されるのでなければなら  
ない。ただそれが醇化と徹底とに於いて欠けるところを  
多く残していたのである。

然も、そうして近代がまだわが国に於ては十分成熟し  
きらぬ間に、それがきびしく批判されねばならぬもの  
多くを含んでいることが、一応明瞭にされたのである。

世界史的に云えば、ソヴィエツト革命が成就されて、自  
由主義にかわる新しい統制主義が、或る程度鞏固な地歩  
を占めはじめたところに、そういうことの端的な表現が  
見出されることになろう。そうして新たに登場した統制

主義が、自由主義を圧倒して世界の新しい統一原理になるか否かは、今日まだ予断の出来ぬことになっているし、あるが如き統制主義がそうした統一原理となることがよいか悪いかにも、なお多少の疑問が残されている。が、そういうものが現れはじめてから、嘗ては新しい時代の中枢的思想としてその進歩性を云われた多くのものが、一応過去のものとしてきびしい批判と吟味の対象とされるようになったことは、争われぬ事実であるし、それらのものの根柢にある自由主義的経済組織が若干の修正を必至とすることも、今日恐らく世界的な常識となってい

ることであろう。敗戦によって惨めに打砕かれたわが国の再建にも、だから修正資本主義か統制主義かという目標が掲げられるのが普通になっているので、旧来の資本主義そのままの延長ということは、もうほとんど考えられぬことになっているのである。と云っても、それは目標としてまだ統一されたものがない、二元の間に彷徨している程度のものだが、それなりに旧来の資本主義的会社組織への批判を含んでいるものであることは、否定出来まい。その意味で、現代は、近代の資本主義的社会機構への疑惑と批判とから出発して、然もまだその究極的



な方向は決定されるに到らず、そのための動搖と低迷とを続けている時代だ、ということが出来るのではないかと思う。

こんな風に見て来る時、此稿が現代を一応近代から區別して考えようとする態度も、恐らく多くの人々に肯定してもらえようと思う。そうして、そういう考え方が許されるとすれば、そういう意味でのわが国文学史上の現代が、大正末期のプロレタリア文学確立期以後の、二十余年間になることは、大体疑問のないところであろうと思う。と云つても、わが国の文学史上に、資本主義や近

代市民的イデオロギイへの批判があらわれはじめたのは、この時期に入ってからだけのことではなかった。プロレタリア文学に先行するものはもつとずっと夙くから出ていた。が、それが本格的な活動期に入って、或る程度まで国民の間に拡散して行ったのは、結局上記の時期以来のことであつた。大正期の半ば過ぎ頃多くの文化人によつて社会主義同盟が結ばれ、次いで「種蒔く人」などが刊行されて、その運動が幾らか本格化しようとした時、例の関東大震災に見舞われて、それが一時潰滅するかに思われた、あの頃までは、此派の運動としても前史

に属するものであった。それが震災の打撃から立上って、力強い再出発を示した頃から、上記の通り、相当強度の社会的浸潤を示しはじめたのであった。その或る程度までの社会的浸潤を持つようになったところには、此派としての夜明けを見るとすれば、それまでの歴史は夜明け前の底流であったということになる。その時期に一つの時代的劃線を引くのが妥当であろうと考える所以である。

とすれば、その時期からはじめて、今日までの間に、わが国の文壇は、極めて特徴ある二つの時期を閲して、

今正に第三の時期に入ろうとするところまで、来ているのだということが出来るのではないか。

その第一は、上記の通りプロレタリア文学が台頭して、それが相当強力な社会的浸潤を示したために、旧市民文学に伝統の力も根強く、プロレタリア文学もその根強さを圧倒するほどの力強さや渾熟にまでは達し得なかった。結局前衛文学としての尖鋭さを以て、伝統市民文学と抗争するという、対立的な形以上には出られなかったのである。と同時に此の時期には、此の両系統の対立に絡んで、通俗文学乃至大衆文学とよばれたものが相当程

度の進出振りを示した。伝統市民文学への批判的勢力として台頭したプロレタリア文学が、云うまでもなく階級的統制主義をその思想的立場としていたのに対して、此の系統は派としての統一もなく、従ってその思想的立場にも統一的なものとはなかつたけれども、その一部にかなり深く封建的イデオロギイに傾いたものがあり、それが此の系統として最も特徴的なものであつたとともに、所謂大衆への影響力はそれが最も強いものであつたかに見えた、その点を少し強調的に取上げれば、此の時期は、動揺し崩れ立つた市民的イデオロギイと、新興の、そ

れ故にまだ必しも熟したとは云えなかつた階級的イデオロギイと、時勢的必然故に結局その系統内部をさえそれによつて統一することは出来なかつた封建的イデオロギイとの、三者が対立と抗争と相互的浸潤とを続け合つていた、云わば三派鼎立の時代だつたということにもなるのであつた。そうしてその鼎立は、結局どちらにより多く傾くということもない間に、政治的情勢の変化と、いう外部的な事情から、うやむやの間に解消されて、そのまま次の時期に流れこまされたのであつた。尤も、伝統的市民文学の流れがそういう間に漸次中世的諦観主義

への傾きなどを顕著化しつつあった上、プロレタリア文学の側にも、此期の終りには、政治的な弾圧などに由来した絶望的な暗さや苦悩から、一種の精神的求道主義への傾きなどが見られるようになったのであっただけに、強いて云えば、大衆文学の示した封建的イデオロギイへの接近が、各方面に多少とも現象しつつあったと云えようかとも思うし、それらが根本的な深いところでは無論相互に関連し合うものであったに相違ないけれども、現象的表面的にはそれらのすべては並行的なもので、大衆文学がそれだけ他を圧倒したり惹きつけたりしたとい

うのではなかった。結局三派は鼎立したままの形で、次の時代の混沌の中に融けこんで行ったと見るのが、至当なのであろうと思う。

なお此の時期には、藤村秋聲荷風潤一郎以下淳浩二犀星などに至る、前代以来の大家中堅の活動に相当目ざましいものがあり、さすがに近代文学最後の時期らしい趣がそこに見出されたのであったが、そういうものの中に、新しい時代の胎動がきかれるはずもなかったことは、島崎藤村の「夜明け前」から、少し後のものだが宇野浩二の「枯木のある風景」や永井荷風の「溼東綺譚」乃至谷



崎潤一郎の深入りして行つた世界などを連想してもらえ  
ば、おおよそには髣髴してもらえようと思う。所詮これ  
らの人々は、新感覺派以後のその系統に立つ新進作家達  
の激動とは云わば対蹠的な形で、同じ近代文学の宿命的  
な道筋を、辿り尽して見せたものと云えるのではないか。  
そういうものの側から云えば、此の時期は將にその宿命  
を辿りつくそうとする近代文学が、そういう時期らしい  
苦悶と徹到とを示した時代であつたとも云えるかと思  
う。大正の末十三四年頃からはじまる此期の終りをどこ  
に置くかは、そういう考え方をすると、よほど決定しに

くい問題になるが、ここには、上記作品の幾つかがその割線の外にはみ出すことを承知の上で、プロレタリア文学集団などがすべて解散され尽した大正八九年頃に、一応それを考えることにしたいと思う。そう考えた上で、此期を、上記の通り、いろいろな流派の対立抗争の時代と、規定してきたのである。伝統市民文学への対立的な勢力があらわれるとともに、市民文学伝統そのものの中にも、革新的な流派の台頭消長が見られた時代とも云えよう。

そういう時期を承け継いだ次の時代は、云うまでもな

く官僚軍閥の国民全体をひきずり廻した、軍国主義的全体主義の時期である。この時期のはじめ二三年間は、そういう時代的政治的な情勢の転換を背景とした、何かしら不気味な圧力を身近に感じて、国民の大部分が不安と低迷との中に置かれた時期であった。文学もまた当然それを反映して、方向の立たぬ混沌と焦慮との中に、著しい低迷を続けていたのであったが、そこに前期に於ける鼎立が何等の帰一点をも見出さぬままうやむやに押流されてしまった後の、はっきりした思想的立場のない現代中期文学の危げな出発点があったわけであろう。市民的

イデオロギイは既に動揺している、プロレタリア文学の依拠としたマルクシズムも伸びきらぬままに押しつぶされてしまった、封建的イデオロギイにもさすがに傾ききれない、然も時勢は何等かの転換を気配している、どうなることか——そういうところから来る低迷と不安と焦慮とであったのである。そういう低迷と焦慮に彩られたまま、強く生きようとする国民の力が、盲目的な策励を続ける——そんな貌を反映した作品が、此期の文学に於ける唯一の積極性を持つものになっていた。

そういう二三年間を前期からの云わば過渡期として、

その後によろやくその相貌をはつきりさせはじめた政治情勢の変化は、既にそうした確固たる思想的立場のない混沌に住していた国民全般を、更に盲目にして、専らその政治的要請の下に動員しようとした。そういう政治情勢の変化を合理化し、それに理論的根拠を与えようとするような言説も、相当多くあらわれはじめた。既に確固たる思想的立場を失っていた人々は、そういう圧力や言説に対する批判もなく、比較的容易にこれに追随したのである。その結果、何がなし明るい見通しと、建設的な意欲と漲溢する力のはけ口を見出し得たような、明るく

浪漫的な気分が文壇のかなり広い範囲をおおうようなことにもなったし、作品の世界や素材の範囲が著しく拡張されたようにも見えた。が、それには、政治的情勢の變化に無批判のままひきずられるという、根本的には極めて消極的な、受身な態度がからみついていたためである、そうした意欲や力に何か根柢的な芯がないような、感動量の稀薄さが感じられずにはいなかっただし、第一そこにくりひろげられる世界が、根本的には一向解決されていない問題をそのままにして、その上で明るい建設の歌を歌い、明るい希望を云おうとしているというにも似

た、浮動的な性質を持たずにはいなかかった。つまり「ほんもの」らしい文学性を持たない追隨的な傾向文学が氾濫し、良識も論理も持たない癖に押強い評論が跳梁したのである。大衆文学系統の人々を主として、伝統市民文学系統の人々のかなり多くと、プロレタリア文学系統からの若干とが、此の流れの中に合流していた。殊にプロレタリア文学系統の人々の中には、此の時代の強権主義の合理化に傾いたかに見えたような人々さえあった。そういう間に、封建時代風な好尚や物の考え方が、漸次に強力化しつつあったことは云うまでもない。

が、さすがに此期の文学も、そういうもの一色に塗りこくられてしまったのでなかつた。そういうものが氾濫して何がなし騒然としているかに見えた文壇の片隅には、そういう風潮とはやや風馬牛の形で、どこか大正期以来の凡人主義などとも通い合うような、静かな写実主義の流れを、細々と承け継いでいるような人々もあつたし、上記のような表層的な積極化とは反対の、深くおどんだ虚無感や、その上に立つてのひどく道化たような身ぶりや、所謂無の思想の常識化されるまでの拡散なども認められた。それだけに、悲観的な人生への見通しや、



中世的な諦観への深入りなども、此期の文学の著しい一側面となっていた。前期にも目立った此の傾向が、此期には前期以来の新進作家達によっても、かなり傾情的に追求されるようになっていたのである。そういうところに、さすがに時代の大浪にもまきこまれきらずにいた、伝統市民文学以来の直接の流れと、その流れの最後のあがきや到達点などが、認められたわけだと思う。そういう流れのすぐそばには、内部的要請と外部的な圧迫という、恐らく両様の理由から来たものであろうけれども、とにかく此の時期の間、ほとんど筆を執らなくなったよ

うな、そんな人々も認められた。「正宗白鳥は戦争について一言も書かない」——そんなことが、伝統市民文学作家としての操持を讃えるような気持をこめて、ささやき合われるようなこともあったのである。

と同時に、嘗てのプロレタリア文学の系統に立つ作家の中には、嘗ての前衛文学者的闘争性を揚棄した、静かなリアリズムへの転進を示して、そうした時代気運の中に置かれた国民生活のありのままのすがたや、そうした時代的な大浪の打返す中での心構えの問題に、深い関心を示しているような人々も少くはなかった。中野・徳永

・宮本・島木……と数え上げると、そこに到不到の差別はあり、それだけ腰の決まりきらぬすがたや、乃至はその腰の据え方に多少の異論のあり得るものはあっても、とにかく此の時代として最も健康なものが感じられたのは、或は此の系列であつたのではないかと思う。

所詮此の時期は、国民を無謀な戦争に駆り立てようとした軍部官僚の政治指導が、表層的な時代気運を作つて、その表層的な気運に踊らされた人々の多くを前面に押出したのでありながら、さすがにそれが文学界全般の気流ともなりきらず、片隅にちぢこまったり一歩半歩と後退

したりしながらも、従来からの文学伝統を守ろうとする人々などの、若干をも残すことになっていたのであった。その意味では、前代以来の鼎立が、なお微かながら続けられていたと、云えぬこともないのであった。封建的軍国主義的な色調の濃かった全体主義の嵐は、かなり激しく吹きまくったのであったけれども、さすがにそれが全文壇を席捲するところまでは行かなかつたのだと云えるのである。

が、そう云っても、此期の終り近くなるにつれて、そうした系統別の色調の相違なども、いよいよ目立たぬも

のになって行つた。左翼系統の人々などは多く執筆を禁止されてしまつたし、その厄を免れるために便乗的な口吻に傾く人々も出て来た。伝統市民文学系統の中世的諦観への逸脱というものも、此の系統としてそこに行くべき必然もあつたと同時に、此期の政治勢力がそうした傾向を「日本的なるもの」として推奨していた、その故に昂まりつつあつた時代の氣運に、むしろ安易に融けこんで行つたような、そんな形がないでもなかつた。だから、もともと批評的立場を棄てての逸脱と見られる此の傾向が、本来的には持つてゐるはずのきびしい否定観や心境

鍛錬とは手を別つて、むしろ安易な肯定観や情趣的享樂主義などに接近して行くような、そんな趣をさえ示すことにもなっていた。そこまで行けばそれはもう此の時期として特異性と云わるべきものではなかった。それではもう此の時代の氣運に乗じて現れた、従つてそうした氣運に対する否定どころか、何等の批判もなかったような作品と、質的にはさしたる區別もなかったわけであろうと思う。片隅に残されていた写実主義的傾向というものも、特殊な鋭さや厳しさは持たなかつたため、ともすればその小味さと影のうすさを思わせるようなもので

しかなかった。近代文学の伝統は、此期に来てはつまりそれだけ影のうすいものになっていたのである。

そんな工合で、此期の文学には、前期以来の対立の尾はなお微に残ってはいても、総括的にはただ一色の、時局的色調に塗りつぶされたものであるかのような、そんな印象が伴いやすかった。然もそれが、必しも個々の作家の内部的必然とはかかわりのない、時代の表層的気運と連関するだけの色調であったために、どうやら作家達の突詰めた「本音」のきかれぬような、従って本来「本音」の上にのみあり得る「文学」も無くなりかけてしま

ったような、そんな趣さえ感じられたのであった。市民的イデオロギイが崩れ去って、然も新しいイデオロギイは確立されない、そういう空白状態に入った精神に、一種の憑き物がしたような時代だったとでも云ったらよいであろうか。とにかくかなり騒然として居り、それだけ一種の賑かさもあったのでありながら、文学史的には淋しい時期だったのだと思う。

ただ、そういう間に、明治大正以来の市民的イデオロギイの未成熟さの故に、ともすれば社会的連帯性のない、ばらばらに切りはなされたものとしてのみ考えられ



やすかつた人間個人を、社会的全体的な連関に於て考えさせる傾向が確立され、ひいては個人的利益追求の代りに職域道義の問題が考えられ、従つて生産主義への徹底が意図されるといふような、新しい生の指標が提示されて、そこから二宮尊徳などが改めて見直されるようになったり、更にもっと一般的に科学への関心が強まったりするようになったところに、此の時代の文学界や思想界の示した積極面があつたことになる。個人が個人として尊重さるべきであると同時に、単なる個人としてのみ考えらるべきものでないことが、こうしてほんとに諒知さ

れるようになったことは、殊に深く注意されてよいことであろうと思う。けれども、歪曲された指導理論のために、せつかくのそうした自覚の上に成立つ職域道義や生産主義を、嘗ての「公益優先」などと相似た、所謂滅私奉公的な、犠牲的なものとのみ錯覚させてしまったことも、忘れてはならない。新しく喜ばしい道義であるはずのものが、それとして正しく徹底させられるところまでは行かなかつたのである。不熟な全体主義が、結局そういう現象をも必至とせずには置かなかつたのである。それが国民心理を猛烈に荒廃させてしまったことは、戦後

の社会が極めてはつきりと物語っていよう。

少しくどくなり過ぎたようだが、現代文学史上の第二期は、大体以上のような内容を持った時期であった。云うまでもなく昭和二十年の決定的な敗戦に到るまで、こういう時期が続いたのであった。前期からの過渡期二三年間を加えれば、大体十二、三年間ということになるのだった。

そういう第二期の後を承けた第三期現在には、まだはじまったばかりである上に、国民自身の内部的要請によって必然的にきりひらかれた新しい時期なのではなく、所

謂配給された新時代であるため、どのように発展して行くものか、今のところ簡単には考えられない。むしろほとんど方向の立たない混乱の中に置かれているというのが、今日の実情である。月々夥しく発表される作品の中にも、積極的な方向を示唆するほどのものは、まだ恐らく出ていないのであろうと思う。

が、そういう作品群の中にあつて、比較的多く人々の注意と関心とを喚び起しているものは、全体主義的弾圧が国民生活を不幸に歪めたり陰惨に曇らせたりしたことを書いたものと、一応自由に解放された人間の人格的未

成熟さ故に陥る醜さを書いたものと、などではないのか  
と思う。とすれば、それが今日として最も望ましいこと  
でないのは勿論としても、それなりに、今日的な現象と  
して、一応の意義は感じられるのではないかと思う。軍  
国的・封建的・全体主義的なものに押し歪められたが故  
の人間的な歪みや積極的な意欲の喪失に対する、悲しみ  
とか憤りとかいうものを表白しているものと、与えられ  
た自由に相応しからぬ人間的未成熟さ故に——それにも  
かかわらず拘束だけは無くなったが故に、ともすれば陥  
りたがる醜陋さを曝露しているようなものとは、それぞ

れに今日のわが国に於ける悲しむべき典型的な事象であるものに対して、挑みかかっているものと云えるのだから。そういう典型的な事象を見詰めることによって、今日当面の問題に深く沈潜することも、或る意味では結構なことなのではないかと思う。それらの作品は、読み方によつては、強権や圧力が人間をひきずり押しつぶすことに対する積極的な憤りや、自主的独立人たり得ぬことの恥しさを、痛感させるものになるのだから。そう思えば、それらの作品も、今日以後の日本人の生き方に対する、或る示唆を含んでいないとは云われまい。それは云

うまでもなくあらゆる強権や圧力を撥ねのけて、あくまでも自主的な自由人たるべき主体の成熟を心がけることの必要さである。明治大正時代の近代文学が遂に成就し得なかつたものが、こうして漸く完成されるところに近づいて来たのかも知れないことが、これらの作品によっても、間接的ながら感じられぬこともないのである。

然も人間が単に自由な個人であるだけのものでなく、縦横無限の社会的連関に生きるものであることは、既に前期の文学その他によって教えられて来たことになってくる。そういう有機体の一つの結び目である人間に、恣

意的な生は許されない。とすれば、解放された自由人は、そうした自覚の上に立って、社会的合目的に生きることを、必至の道として要請されていることになる。此道と、個人的自由や自主的生活を要望する気持とは、どうしても調和出来ない二元なのであろうか。そうだとすれば人生は結局悲劇的なものでしかあり得ない。

こんな風に考えると、今日自由と人格の確立とを当面の要請としている文学が、次にぶつかるべき題目は、当然ここにあることになるのではないか。わが国の当面している事情が、その二つの道の融和への努力を、必至の



ものとして要請しているのではないかと思うし、政治情勢も漸次にそうした方向に傾きつつあるように思われる。とすれば、文学もまたいずれその問題に触れその問題と取組むことになるのではないかと思うのである。それが調和的な結論に到達するか否かは、しばらく別問題としても――。今日の文学の進路も、こうして幾らかは想像出来ることになるのだと思う。

それは、文壇今日の様相からすれば、無論飛躍的な想像であり過ぎるものだし、そうした想像を否定するような材料もないことはないけれども、一方にはそれに或る

程度の裏打となりそうな事実も、少くはないと思う。そうして若しそういう道が辿られるとすれば、現代文学は、ここに一つの熟した結論に到達することになるわけであろう。以上辿って来た範囲で明瞭なように、現代は、近代が人間解放の時代であつたのに対して、そうして解放された人間の新しい組織化の時代だと云うことが出来る。第一期には階級的に組織化されようとした。第二期には、全体主義の名の下に、国家的民族的乃至軍国主義的に統一されようとした。第三期には、新しい民主主義国家を構成する要員として、合目的主義的に組織化され

ようとしている。前代への疑惑と批判とから出発して、  
そういう一定方向の確立と組織化への傾向とが目立つよ  
うになって来たところに、現代を近代から区別して考え  
る根本の理由があったのだが、若しそれが此の第三期に  
於て上記に想像したような線に沿うて落着いて行くもの  
としたら、それは現代としての成熟であると同時に、近  
代としての成熟でもあり得るわけであろう。

一期二期の混乱と動揺とは、そういう成熟に達する前  
の左顧右眄だったということにもなる。此稿の冒頭以来、  
現代と近代とを「一応」区別して考えるなどというアイ

マイな書き方をして来た所以だが、それはとにかく、現在から将来への展開がどうなるにしたところで、現代的な組織化と或はそのための闘いと並行的に、明治大正時代に十分獲得しきれなかった人間の近代的性格を確立するため、この闘いをも、此期の人々は闘わねばならない。然もそれが、たださえ未成熟であった上に、プロレタリア文学台頭期に崩れ立ち、軍国的全体主義の重圧によって、ほとんど押しつぶされきってしまった時代の後に、闘い取られねばならぬものになるのであるだけ、その仕事は随分困難に満ちたものになるであろうことも、想像する

に難くないわけであろう。そういう見方からすれば、現代第一期は人間自我の動揺分裂からその喪失への時代、第二期はそうして自我を見失った人間が上からの力に操り動かされていた時代、そうして第三期はその喪われた人間自我の恢復とそれの新しく自主的な組織化の時代とも規定することが出来るのである。それは上記の通り二重の意味を持つ闘いになるので、それだけ困難も多いわけなのだが、それがそういう時代的特質を完成するための闘いなのである以上、如何に困難であろうと何とんでも闘いきられねばならぬのだと思う。

そういうことを思うにつけて、明治以来の近代文学が、一応はその近代的性格を樹立して来たのでありながら、結局に於ては何故時代の圧力や封建的残滓に墜されてしまったって、そういう性格に徹するだけの成熟を持ち得なかったのかということへの反省なども、参考的なものとして必要になると同時に、そういう時代に直接先行した現代文学の種種相を、もう少し立入って調べることも、極めて必要な仕事になるわけだろうと思う。そういう仕事への手はじめとして、次にはまず近代派文学の輪廓をおおよそに辿ってみたいと思う。それは上記の通り現代文学

史上の第一期に於て、プロレタリア文学や大衆文学と鼎立のかたちを以て、伝統市民文学伝統の内部から、それへの批判的傾向として台頭したものの、厳密に云えば例の新感覚派から新心理主義その他に到る一連の系列を総括したものののだが、それをそのような総称の下に括り上げたのは、此の系統内部の人々その他が、その時々々の傾向などについて時折用いていた称呼を、そのまま借用しただけのものに過ぎない。それだけに、今日になってみればそれはもうあまり適当な称呼とは云われぬように思うが、他により適当な称呼も見出されぬままに、止むを

得ずその比較的称びなれた称呼に従うことにしたのである。むしろすなおに「新感覚派以後」とでも称んだ方が、不十分なりにかえって端的でよかったかも知れない。とにかくそれは、上記の通り、行きつまった伝統市民文学に対する内部的批判に立った革新運動として台頭したものでありながら、そういうものとしての性格に十分徹しきれぬようなかたちの多くを示してしまったために、そこで解決し残された問題の多くが、直接今日の文学ともかかわり合うものの多くを持つようになっているのではないかと思う。少くともそれが、その系統として担った



はずの課題を、正しく担いとおおせたか否かを見究めることが出来たら、そこに今日の在るべき文学についての、幾らかの示唆が生れるのは必然であろう。そんなつもりで出来るだけの調査を試みることにしようと思う。

（昭和二十一年七月三十一日朝「中等教育」）



日本文学電子図書館

---

現代日本文学の概観

著 者：片岡良一

制作者：宮澤一郎

底 本：「近代派文学の輪廓」

白楊社

昭和25年11月1日発行

日本文学電子図書館